

# The Whisper from Amherst

## エミリィのささやき

これはエミリィの詩人論、ないしは詩論ともいえる作品です。詩人から独立して生きる「詩」そのものを、詩人が火をともすランプの芯にたとえて、詩人が立ち去っても、その芯が「生命の光」をもって燃えるならば、それぞれの時代がレンズとなって、その輝きを周辺に広げると述べています。エミリィは、自分が「小さき物」や「誰でもない人」であるという自己を強固にすると同時に、自分が消えたあとも作品が時代というレンズをとおして周辺に投射されることを、詩人の仕事としていたようです。

ということは、出版をあきらめ、自身亡きあとは燃やすように言い残したはずの1800点近くの作品が、時代というレンズをとおして静かに輝きを放っていることを心のどこかで予測していたのではないでしょうか。

## The Poets light but Lamps—

The poets light but Lamps—  
Themselves—go out—  
The Wicks they stimulate—  
If vital Light

Inhere as do the Suns—  
Each Age a Lens  
Disseminating their  
Circumference—

詩人はランプに火をともすだけ—  
みずからは—消えていく—  
詩人は芯をかき立てる—  
もし生命(いのち)の光が

太陽さながら、そこに宿るなら—  
それぞれの時代はレンズとなって  
押しひろげます  
円周を—



(岩波文庫「対訳『ディキンソン詩集』」

亀井俊介 編より)